



促した。

モデルニスモは狭義には象徴主義の美学や韻律をスペイン語詩に移入する試みだが、現在は、モデルニスモを詩だけでなくクロニカ、小説、エッセイなど、広範なジャンルにわたる多様な刷新動向の総体と捉える見方が一般的である。当初それらは互いに関わりを持たない試みの集積にすぎなかったものの、1890 年代、ラテンアメリカ各地の新しい文学動向のもつ共通性を敏感に感じ取ったダリーオがモデルニスモという名前をつけたことで、作家たちの刷新への志向は運動としての一体性を獲得した<sup>2</sup>。モデルニスモは 1900 年ごろにはスペインにも伝わり、およそ 1920 年ごろまで影響力を持ち続けた。

モデルニスモの本質をなすのは、ヨーロッパ、とりわけパリ発の革新的芸術と自己の創作とにラテンアメリカの作家たちが向けはじめた批判的意識である。彼らは他者の生み出した近代性を自身の近代性のモデルとみなすという意味で、芸術の発展の単線性を認めているようではあるが、一方で、作家個人の独自性、または地域や国家に属する独自性が作品に表れることを渴望してもいた。このジレンマの中で、ラテンアメリカで初めて、安易に土着的なテーマに走るのでも、外国語文学や過去の文学の無批判な模倣に甘んじるのでもない作品のあり方が模索されはじめた。ダリーオの好んだモチーフや文体は、後の世代によって過去のものとなされたが、本質的な問題意識は 20 世紀に生き残った。ボルヘスが「アルゼンチン作家と伝統」（1953）において論じたような、地域や国家に関わる自己規定と創作の関係をどう捉え、自身にとっての伝統をどこに見出すかという、ラテンアメリカの作家にとって避けられない問いかけは、ダリーオの時代に始まったのである。

## II.

2016 年を、留学先であるスペインのマドリードと、3 月から 5 月にかけて研究滞在したアルゼンチンのブエノスアイレスで過ごした私は、没後 100 年にちなんで開催されたイベントに多く足を運び、ダリーオがどのように回顧されているかを体感する機会に恵まれた。

2015 年 11 月 19 日、アテネオと呼ばれるマドリードの文芸協会では、在スペイン・ニカラグア大使館の主導による記念式典が、他の記念イベントに先駆けて開かれた。各国の大使館に招待状を送っていたのか、はじめニカラグアの人たちは私を日本大使館の人間と勘違いしていたが、ダリーオ研究をしていることや、同年 2 月にニカラグアに滞在してダリーオの生家などを訪れたことを話すと喜ばれた。ダリーオは少年時代より後にはほとんどニカラグアに戻らず、詩の中に土着的な要素もほぼ見当たらないとはいえ、ニカラグア人にとっては彼らの国民詩人であり、米国海兵隊に対する抵抗運動の指導者サンディーノと並ぶ愛国心高揚のシンボルなのだ。なお、私は日本にいなかったため行けなかったが、2016 年 5 月 26 日に東京のセルバンテス文化センターで催されたダリーオ・シンポジウムの企画に際しても、在京ニカラグア大使館が尽力したそうである。

ブエノスアイレスは、1890 年代にダリーオが暮らしたことでモデルニスモの一大拠点

となった街であり、ブエノスアイレスの新聞『ラ・ナシオン』がダリーオに晩年まで記事執筆を依頼し彼を経済的に支えつづけたこともあって、同地におけるダリーオへの関心は高い。私は到着するとまず、2016 年 3 月 7 日から 10 日まで開催された国際学会「ルベン・ダリーオ国際会議『諸世界の縫合線』」(Congreso Internacional Rubén Darío “La sutura de los mundos”)に参加した。これは、ブエノスアイレスのトレス・デ・フエブレロ国立大学が、没後 100 年に合わせて既存の学会組織などの関与なしで独自に企画したイベントである。ラテンアメリカ諸国、米国、スペインから集まった約 100 名の報告者の中には、ダリーオ研究において既に実績を重ねている専門家が多数含まれており、現地の若い学生も相当数いた。報告には、ダリーオが刊行に関与した新聞・雑誌を議論の対象にするものが多かった。このことの背景としては、1970 年代にモデルニスモ研究に社会経済的観点を導入し、運動の展開におけるジャーナリズムの重要性を論じたウルグアイの批評家アンヘル・ラマの存在感が、ラテンアメリカにおいては現在も大きいことが考えられるが、ブエノスアイレスに一次資料が多いことも関係しているのだろう。最終日の夜にはガラ・モデルニスタと称したパーティーが開かれ、詩の朗読あり、弦楽四重奏団の演奏あり、最後には DJ が音楽をかけ、皆夜中まで踊って楽しんでた。

アルゼンチン国立図書館で 3 月から 5 月まで開催されていた展示「ルベン・ダリーオ——ブエノスアイレスのモデルニスモ」(Rubén Darío, el Modernismo en Buenos Aires)を見に行くこともできた。展示されていたのは初版本や手書き原稿などで、品数はそれほど多くなかったが、約 100 ページの全編カラー印刷のパンフレットが会場に無造作に積み上げられて無料で配付されていて驚いた。

マドリードでは、9 月 12 日から 15 日まで、私の留学先であるマドリード・コンプルテンセ大学を会場として、スペイン・イスパノアメリカ文学学会 (Asociación Española de Estudios Literarios Hispanoamericanos) の第 12 回大会が、ダリーオとモデルニスモをテーマに開催された。開催責任者が指導教員のロシオ・オビエド教授だったこともあり、私は研究報告を行うだけでなく、実行委員会の一員として準備や当日の運営にも係わることになった。6 月にブエノスアイレスから戻って研究室を訪ねると、先生は、国内やラテンアメリカ諸国から予想をはるかに越える 120 の報告申し込みがあったことに喜びながらも、こんな数の人間をどこに収めればいいのか、とって途方に暮れていた。結局私たちは、ホールと最大 4 つの教室を同時に使い、マドリード市によるレセプションなどの関連行事も含めると毎日朝 10 時から夜 9 時まで続くプログラムを組んで対処した。テーマをダリーオだけに限定しなかったぶん、ブエノスアイレスの会議よりもいっそう多様なテーマの報告があり、特に他の作家におけるダリーオの受容のあり方について論じる人が多かったようだ。実のところ、当日は来場者対応や事務作業に追われて人の報告をろくに聞くことができなかった。つい日本人らしさを発揮してまじめに働いてしまったが、もっと適当にサボっていればよかったと思わないでもない。ブエノスアイレスで知り合った人たちの一部とは、この機に再会することができた。

また、マドリッド・コンプルテンセ大学の歴史図書館には、ダリーオの手稿やメモ、書簡、写真、新聞の切り抜きなど約 5000 点の資料からなるダリーオ・アーカイブ（Archivo Rubén Darío）があることから、9 月から 12 月までは同図書館内で「ルベン・ダリーオ——紙片の中の物語」（Rubén Darío, una historia en fragmentos de papel）と題してその一部が展示された。ダリーオと当時のスペインの作家たちのやりとりや家族との関係に焦点が当てられ、ホテルで注文したウィスキーの伝票などの珍しい資料もあった。

ダリーオ関連のイベントが次にこれほどたくさん開催されるとすれば、生誕 200 年にあたる 2067 年だろうか。

### III.

今後のダリーオ研究においてなによりも必要なのは、信頼できるダリーオ全集の編纂だろう。これまでに全集の名の付く作品集はいくつかあったが<sup>3</sup>、いずれも収録作品は不完全であるうえに、注などは一切付されておらず、誤植も目立つ。詩集ごとの批判校訂版や、新たに発掘された新聞・雑誌記事などは個別に刊行されてきたものの、決定版というべきダリーオ全集は今も存在しないので、いまダリーオのテキストを論じる際には、扱う作品やテーマに応じて依拠するエディションを適宜選ばなければならない。資料の散在という困難が背景にあるとはいえ<sup>4</sup>、ダリーオのような重要作家の一元的な作品収集・校訂が死後 100 年たっても進んでいないのは、スペイン語圏の研究者たちの怠慢であると思う。拙稿「国際研究プロジェクト『ダリーオ十年紀』：情報通信技術時代の文献学の挑戦」（『日本イスパニヤ学会会報』、第 23 号、2016 年）<sup>5</sup>で詳しく紹介したように、トレス・デ・フェブレロ国立大学は、上述の「ルベン・ダリーオ国際会議」を主催した際に、今後 10 年間でダリーオの既知の作品すべてを収める全 20 巻の批判校訂版全集を出版する国際的プロジェクトを立ち上げることを発表した。プロジェクトの順調な進捗を祈っている。

ダリーオやモデルニスモについては、近年「世界文学」の議論の文脈で論じられることも多い。「世界文学」の議論は主に米国やヨーロッパから 20 世紀末以降に生じたが、そこにラテンアメリカの側からの視点を加える際に、西欧の同時代の美学に対するラテンアメリカで最初の批判的アプローチであるモデルニスモやその中心人物ダリーオは恰好の材料になる。例えばエフライン・クリスタル（Efraín Kristal）は、“Considering coldly … A Response to Franco Moretti”（2002）において、ダリーオやセサル・バジェホなど 19・20 世紀のラテンアメリカ詩を例に挙げながら、モレットティの“Conjectures on World Literature”（2000）における中心・周縁論への反証を行った。イグナシオ・サンチェス・プラド（Ignacio Sánchez Prado）は、論集 *América Latina en la “literatura mundial”*（2006）に、ダリーオの生まれた小さな町メタパの名を取った「メタパの息子たち」（Hijos de Metapa）という題のイントロダクションをつけ、ラテンアメリカ作家の世界における周縁的地位を示唆するとともに、「世界文学」の議論そのものが含む欧米中心性をも指摘している。また、マリアノ・シスキンド（Mariano Siskind）は、*Cosmopolitan Desires: Global Modernity*

*and World Literature in Latin America* (2014) において、ダリーオらモデルニスモの作家の作品分析から、テキストの普及の構造としてではなく、近代化に向けた言説的戦略としての「世界文学」のあり方を提示した。ここに挙げた3名はいずれも米国で教鞭を執るラテンアメリカ人だが、これからはスペイン語圏の中からも、既存の「世界文学」の議論を批判的に応用しより豊かにするようなダリーオ研究が出てくるかもしれない。

日本では1920年に堀口大學によってダリーオを紹介する文章が書かれたものの<sup>6</sup>、今も邦訳で読むことのできるダリーオの作品数は相当限られている<sup>7</sup>。今後もしも主要な詩集が邦訳されることがあるのなら、その多様な韻律や音響効果を日本語にどのように反映させるか、あるいはさせないかが、翻訳者にとっての課題となるだろう。

#### 註

1. 大半は署名付きで、文学、芸術、政治、社会などの時事的なトピックを主観を交えて記したクロニカというジャンルに属する。
2. したがって、スペイン語文学のモデルニスモは、1920年ごろに始まる前衛的な文学動向を指す英語圏の「モダニズム」やブラジルの「モデルニズモ」とは別物である。マテイ・カリネスクによれば、同時代の美的革新の広汎な動きを語るために、「モダン」というラベルを世界で最初に肯定的に用いた人物がダリーオだった（『モダンの五つの顔』、富山英俊・梅正行訳、せりか書房、100ページ）。
3. *Obras completas* (Edición de Alberto Ghirardo, Madrid: Mundo Latino, 1917-1919), *Obras completas* (Edición de M. Sanmiguel Raimúndez, Madrid: Afrodisio Aguado, 1950-1953).
4. 手稿等については、先述したマドリード・コンプルテンセ大学のアーカイブや、チリ国立図書館、ダリーオと親しかったスペインの詩人フアン・ラモン・ヒメネスが亡命中に寄贈した資料を所蔵する米国議会図書館、ニカラグアのルベン・ダリーオ博物資料館（Museo Archivo Rubén Darío）などにまとまった量があるが、その他は小規模なコレクションに散らばっている。
5. 日本イスパニヤ学会のウェブサイト（<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>）で閲覧可能。
6. 「リュウベン・ダリオ」（『世界文学講座』第10巻）。『堀口大學全集』第5巻（小澤書店、1983年）に収録されている。
7. 筆者が確認したのは以下のとおり。「おとめのためのおくりもの」（荒井正道訳、『少年少女文学全集』第50巻、講談社、1962年）、「ソナティーナ」（荒井正道訳、『世界名詩集大成』南欧編、平凡社、1967年）、「春に寄する秋の歌」（細川幸夫訳、『論集』第5号、駒澤大学外国語部、1976年）、「ニカラグアへの旅」（渡邊尚人訳、日本図書刊行会、1994年）、「カチュール・マンデス論」（竹村文彦訳、『東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』第3号、1998年）、「降誕祭の宴」（野替みさ子訳、『ラテンアメリカ短編集』、彩流社、2001年）、「聖夜のできごと」（平井恒子訳、『ラテンアメリカ短編集』、彩流社、2001年）、『マルガリータ』（ひろかわかずこ訳、新世研、2002年）、『青… アスルー』（渡邊尚人訳、文芸社、2005年）、「夜曲」3篇（棚瀬あずさ訳、『れにくさ』第4号、2013年）。